



Title	自尊感情と学校生活の関係性：中学校学力生活実態調査から
Author(s)	大川, ヘナン
Citation	教育文化学年報. 2023, 18, p. 171-180
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91736
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自尊感情と学校生活の関係性 —中学校学力生活実態調査から—

大川 ヘナン

1. はじめに

自尊感情は心理学研究で頻繁に取り扱われるテーマであり、これまでも数多くの知見が蓄えられてきた概念である。これまでの心理学研究を外観すると自尊感情の定義は主に二つに分けることができる（遠藤 1999）。一つ目は自尊感情とは自分自身による自己の評価であり、自己の理解の上で成り立っているという定義であり、もう一つは、自尊感情とは人格同様に人々の内面に存在しているものである。こちらは固定的な属性として存在するという定義である。これらの定義からわかるように、自尊感情は個々人の内面と強く結びついており、人が生きていく上で重要な要素だということがわかる。

自尊感情が人にとって重要なキーワードであると同時に、自尊感情は学校教育現場でも重要視されている概念である。自尊感情が子どもたちの学習において注目されている背景には、自尊感情が子どもたちの日々の生活の様々な面に影響を与えているからである。例えば文部科学省（2017）の調査によると自尊感情⁽¹⁾が高い子どもは挑戦心や勉強に関する意識が高い一方で、努力しても報われないといった悲観的な意識が低いことが確認されている。

このような自尊感情と学習意欲を結びつけて鹿児島県教育委員会（2020）は以下のように論じている。

自尊感情は「生まれてきてよかった」、「自分にはできることがある」等、自分自身を基本的にかげがえのない価値ある存在とする感情であり、学習意欲の向上や良好な人間関係を築こうとする源となります。

そして、自尊感情が育まれることにより、子どもが自他のよさや違いを認め、尊重する具体的な態度や行動につながっていくものであり、さらには、失敗しても立ち直る心の育成にもつながっていくものとされています。

（鹿児島県教育委員会 2020, p. 1）

このように、自尊感情の高い子どもは学校での学習のみならず、学校を離れた後の人生に

もより前向きに取り組むことができることがわかる。そこで本稿では中学生の自尊感情に着目して、日々の生活と自尊感情がどのように結びついているのかを明らかにし、中学生と自尊感情の関係性について検討する。分析には京都府 N 市の公立 N 中学校（以下、N 中）で実施された学力・生活実態調査を用いて、自尊感情と日々の生活の関係性の明らかにしていく。

2. 分析方法と使用変数の説明

1) 分析方法—重回帰分析

本稿では重回帰分析を用いて N 中学校の中学生たちの日常生活と自尊感情がどのように結びついているのかを検討する。重回帰分析とは一つの被説明変数に対して、複数の説明変数を設定し、説明変数の効果を一定にした場合の説明変数の被説明変数に対する効果を解明することを目的とした分析手法である（寺島 2007）。説明変数とは独立変数とも呼ばれており、原因を表す変数であり、被説明変数は従属変数と呼ばれており、結果を表す変数として捉えられている。本稿では自尊感情に焦点を当てて分析を行うため、従属変数を自尊感情として据えて、日々の生活における様々な関わりを説明変数としてその影響力の検討を行う。

2) 従属変数—自尊感情

分析に先立って、本稿で用いる変数の確認を行う。本項では従属変数の提示を行い、次項で独立変数の提示を行う。

まず従属変数であるが、前述の通り本稿では従属変数を自尊感情として分析を行う。本稿の検討課題は中学生の日々の生活がどのように自尊感情に影響を及ぼしているのかというものであり、それぞれの独立変数がどのように自尊感情に影響を及ぼすのかを明らかにしていく。

本分析で用いられるデータは後述で説明を行う「学力・生活実態調査」から得られたものである。本質問紙調査における、「ものごとを人と同じくらいには、うまくやれる」、「自分には、自慢できるところがあまりない」、「今の自分に、ほぼ満足している」、「得意なことよりも苦手なことの方が多い」という 4 つの質問項目は自尊感情を尋ねた項目として仮定し、これらの 4 つの質問項目に対して主成分分析を行い合成変数を作成した⁽²⁾。

表 1 自尊感情変数の主成分分析

	主成分1
ものごとを人と同じくらいには、うまくやれる	0.611
自分には、自慢できるところがあまりない	0.788
今の自分に、ほぼ満足している	0.633
得意なことよりも苦手なことの方が多い	0.778
因子抽出法: 主成分分析	

3) 独立変数

続いて本項では独立変数の確認を行う。本稿の検討課題は中学生の日々の生活と自尊感情の関連であるため、日常生活に関する独立変数を用いることになるが、基礎的な社会的属性として性別、学年（年齢）、就学援助の受給の有無（経済状況）、そして学力を独立変数として検討を行う。

その後、より日常生活に密着した検討を行う。ここでキーワードとなるのが「他者」との関係性である。遠藤（1999）が論じられているように、自尊感情は他者との関係性の中で、どのように自身を理解するのが重要な要素となってくる。そこで本稿では具体的に中学生たちが日々密接に関わることになる、保護者、友人、そして教員という3つのカテゴリーに着目して検討を行っていく。具体的には保護者のカテゴリーでは保護者との関係についての質問項目を独立変数として取り扱う。友人のカテゴリーでは友人との関係を問う質問項目を独立変数として採用し、最後に教員のカテゴリーでは教員との関係の質問項目を独立変数として採用する。それぞれの具体的な質問項目に関しては、各分析パートでより詳細に説明を行うため本項では割愛する。

4) 質問紙調査の概要

本稿で使用される変数は既に述べたように N 中学校で実施された「学力・生活実態調査」である。本質問紙調査は京都府 N 市にある公立 N 中学校で実施されたものである。N 中には市内の2つの小学校区から生徒が通学しており、中学校全体で約 300 人規模の中規模校である。質問紙調査は 2022 年 10 月に生徒に対して行われた WEB アンケートである。質問紙は 32 の設問で構成されており、家庭学習から学校外活動、または保護者、地域、教員との関係に触れた多岐にわたる内容となっている。また本質問紙調査では学力データとして 2022 年の 1 学期の中間及び期末テスト及び 2 学期の中間テストの結果も含まれている。さらに生徒の家庭状況に関しては N 中の教務主任に対して個別の生徒の家庭状況について聞き取りを行い、データを補完している。集められたデータは N 中の教員によりデータ入力が行われた後に匿名化して分析に用いられた。

データの構成は N 中学校のほぼ全数に当たる 301 名が回答しており、男女比率は男子 48.8%、女子 51.1%である。学年別ではそれぞれの学年が 30%前後であり、学年による偏りは見られない。N 中における社会経済的背景として一人親世帯は 23.6%であり、生活保護

受給世帯は 3.3%，そして，就学援助受給世帯に関しては 25.9%である。これらの数値から N 中にはある一定程度のしんどい層の子どもたちが通っていることも確認できる。

3. 分析結果

本節ではそれぞれの基本的属性，保護者との関係，友人との関係，教員との関係を順に検討していく。

1) 基本的属性と自尊感情

本分析では性別の変数として女子ダミー，年齢の変数として学年，経済状況の変数として就学援助ダミー，そして学力の変数として一学期末合計点を変数として採用した。これらの基本的な属性を確認すると表 2 のような結果となった。

表 2 基本的属性と重回帰分析

	標準化係数
女子ダミー（性別）	-0.280 **
学年（年齢）	-0.092
就学援助ダミー（経済状況）	0.079
一学期期末合計（学力）	0.153 **
p<0.01, *p<0.05 N=269, R2=0.107	

性別の効果として女子生徒であることが自尊感情に強くマイナスの効果を示していることが確認できる。女子生徒の自尊感情が男子生徒よりも自尊感情が低い点は既に先行研究でも指摘されている事項であり（加藤他 2013），本稿でも同じ結果が示された。さらに自尊感情に影響を及ぼしている変数として学力も表れた。しかし，学力の変数は性別の変数よりも弱い影響力であることが確認できる。一方，年齢や経済状況に関しては自尊感情に影響を示す結果は現れなかった。つまり，中学生にとって性別が自尊感情に最も強く影響を与えており，次に学力が影響を与えている。しかし，それ以外の変数の影響力は確認できなかった。この結果は N 中学校特有の可能性もあるが，先行研究と照らしても似た傾向が現れていることがわかった。これらの基本的な属性を踏まえた上で，次項で保護者，友人，教員との関係の変数の確認していく。

上記の重回帰分析で学力が自尊感情にプラスの影響を及ぼしているという点に着目して，さらに追加でもう一つの重回帰分析を実施した。それが「学校の授業は，どの程度わかりますか。教科別に教えてください」という教科理解度を独立変数とした重回帰分析である。

表 3 教科理解度と重回帰分析

	標準化係数
国語	-0.050
数学	0.152 *
理科	0.071
社会	0.087
英語	0.179 **
p<0.01, *p<0.05 N=276, R ² =0.121	

結果は表 3 の通りである。教科理解度はそれぞれの生徒の主観的な視点になるが、どのような教科が理解できていると思うかによっても自尊感情に影響を与えるという興味深い結果になった。本分析では英語と数学が自尊感情にプラスの影響を与えていることが確認された。つまり、中学生の中で教科による序列が暗黙の中で確立しており、その教科に自信があるのかどうかで生徒たちの自尊感情に影響を及ぼしていることが伺える。

2) 保護者との関係と自尊感情

本項では保護者との関係と自尊感情の関連を検討するために、保護者との関係性を変数とした質問項目を用いて重回帰分析を行う。本分析で用いる変数は次の通りである。「家の人は、自分が困っていたら助けてくれる」、「家の人が困っていたら助けたい」、「自分の家族は信頼できる」、「家の人と学校であったことを話す」という 4 つである。

表 4 保護者との関係性と重回帰分析

	標準化係数
家の人は、自分が困っていたら助けてくれる	0.072
家の人が困っていたら助けたい	-0.161
自分の家族は信頼できる	0.299 **
家の人と学校であったことを話す	0.089
p<0.01, *p<0.05 N=275, R ² =0.088	

これらの変数に対して重回帰分析を行ったところ、「自分の家族は信頼できる」という変数のみが有意な結果を示した。信頼できる他者がいることが子どもの成長にとって重要な要素であることは様々な研究で指摘されてきたが、本稿でもそのことが示された。一方で

「家の人は、自分が困っていたら助けてくれる」や「家の人が困っていたら助けたい」といった家族間における支援的な関わりに関しては本分析では有意な結果が示されなかった。しんどさを抱える生徒の中には家族が実質的に支援ができない場合があり、援助の有無ではなく信頼関係が自尊感情にプラスの影響を及ぼしているという点は重要な知見として捉えることができる。

3) 友人と自尊感情

次に友人との関係と自尊感情の関連について検討を行う。本項の分析では「友だちは、自分が困っていたら助けてくれる」、「友だちが困っていたら助けたい」、「自分の友だちは信頼できる」、「一緒に遊んだり勉強したりする友だちがたくさんいる」を友人との関係変数として取り扱う。

表 5 友人との関係性と重回帰分析

	標準化係数
友だちは、自分が困っていたら助けてくれる	0.035
友だちが困っていたら助けたい	-0.045
自分の友だちは信頼できる	0.120
一緒に遊んだり勉強したりする友だちがたくさんいる	0.249 **
** $p < 0.01$, * $p < 0.05$ N=273, $R^2 = 0.102$ **	

これら 4 つの変数に対して有意な結果が示されたのは「一緒に遊んだり勉強したりする友だちがたくさんいる」という変数である。大学生に対して行われた自尊感情に関する調査では自尊感情は「広い」友人関係よりも、「深い」友人関係の方がより自尊感情に影響を与えることが示された（小塩 1998）。つまり、大学生では友達の数よりも質がより自尊感情に影響を与えるということである。本稿での中学生に対する分析では、大学生に対する結果と違う結果が示された。「自分は友だちを信頼できる」という質に関する変数ではなく、「一緒に遊んだり勉強したりする友だちがたくさんいる」という量に関する変数が自尊感情に影響を与えることが示された。それは中学生の段階では友人との深い繋がりよりも、より多くの友人を持つことが自尊感情に影響を与える一つの指標となっているのではないかということが推察される。

4) 教員と自尊感情

次は教員と生徒たちの関係である。ここでは「学校の先生たちは、自分が困っていたら助

けてくれる」,「学校の先生からの期待にこたえたい」,「学校の先生には安心して相談できる」,「いろいろなことを話せる先生がたくさんいる」を教員と生徒の関係を表す変数として使用する。

表 6 教員との関係性と重回帰分析

	標準化係数
学校の先生たちは、自分が困っていたら助けてくれる	-0.193 *
学校の先生からの期待にこたえたい	0.029
学校の先生には安心して相談できる	0.292 **
いろいろなことを話せる先生がたくさんいる	0.189 *
p<0.01, *p<0.05 N=274, R ² =0.141	

この分析では保護者や友人との関係で見られた分析結果とは異なり、より多くの変数が有意な結果を示した。その中で最も自尊心に強い影響を与えているのが「学校の先生に安心して相談できる」という変数である。これも保護者の分析で示された結果と同様に、信頼できる他者の存在が生徒たちの自尊感情に影響を与えていることが再び確認できた。次に影響を与えていたのが「いろいろなことを話せる先生がたくさんいる」という量に関する変数である。固定の教員のみとの関係性ではその教員に依存する形になるが、話せる教員が複数いることでより子どもたちが安心を感じることができると推測できる。そして、最後にマイナスの影響を示していたのが、「学校の先生たちは、自分が困っていたら助けてくれる」という教員の手助けに関する変数である。この変数は教員が生徒を支援することで自尊感情にマイナスの効果があると読むことができるが、一方で自尊感情の低い子どもたちが「学校の先生たちは、自分が困っていたら助けてくれる」と答えている可能性もあり、自尊感情の低い子どもたちは教員が適切に助けてくれると感じていると捉えることができる。この結果に関しては調査対象となった N 中特有の学校文化や教員文化によって生じた可能性もあるため、この結果に関してはより質的に吟味することが求められる。

5) これまでのまとめ

最後に、これまでに有意な結果を示した変数を全て用いて重回帰分析を行い、どの変数が自尊感情により強い影響力を持っているのかを確認する⁽³⁾。本分析ではこれまで有意な結果が見られた項目を取り上げ、性別として女子ダミー、学力として一学期末合計得点、信頼できる家族、友人の数、教員の助け、安心できる教員との関係、そして、話せる教員の数を変数として扱う。

表 7 これまでの有意な変数による重回帰分析

	標準化係数
女子ダミー	-0.192 **
一学期期末合計	0.153 **
自分の家族は信頼できる	0.077
一緒に遊んだり勉強したりする友だちがたくさんいる	0.207 **
学校の先生たちは、自分が困っていたら助けてくれる	-0.207 **
学校の先生には安心して相談できる	0.234 **
いろいろなことを話せる先生がたくさんいる	0.097
p<0.01, *p<0.05 N=266, R ² =0.247	

これらの 7 つの変数を独立変数として重回帰分析を行った結果、家族信頼と話せる教員
 の数は有意でなくなり、他の変数は依然として影響力を持っていることが示された。しかし、
 その影響力の強さには差が見られた。最も影響力を残しているのが性別である。女子である
 ことが強くマイナスの方向に動いている。つまり女子生徒は他の変数を統制した上でも、男
 子と比較して自尊感情が低くなりやすいということである。次に影響力の強い変数は友人
 の数、学校の教員の助け、そして、教員との安心した関係が同等の影響力を示した。教員と
 の安心できる関係と友達の数が同じような影響力を持っており、子どもたちの自尊感情に
 対して多様な要因が影響を及ぼしていることが確認できる。そして、前項の結果と同様に本
 分析でも教員のサポートがマイナスの影響を示していることから、それぞれの学校の取り
 組みもまた子どもたちの自尊感情に影響を与えていることが推測できる。この場合には自
 尊感情の低い子どもたちが教員が助けてくれると捉えており、N 中の教員の働きかけが結
 果的にはプラスに働いているのではないかと考えることができる。しかし、一方で学校の取
 り組み次第では子どもたちの自尊感情にマイナスの影響を与える可能性もあり、学校はそ
 れぞれの取り組みがどのような影響を与えるのかを丁寧に見る必要がある。

本分析ではこれまで有意な結果を示していた家族との信頼と話せる教員の数が有意な結
 果で見られなくなっていることが確認できる。これらの原因を考えた場合に、一つ目には中
 学生は家族関係よりも学校生活における人間関係に影響を受けていると推測することがで
 きる。二つ目には教員との関係は性別や学力、友人関係を考慮した場合には量よりも質的な
 関係がより自尊感情に影響を与えていると考えることができる。

4. 考察

最後に本稿で明らかになった知見をまとめて、中学生の日常生活と自尊感情の関係性に

についての検討を行いたい。はじめに本稿の分析から見出された知見として、先行研究と同様に女子生徒は自尊感情を高く持つことに課題を抱えていることが明らかになった。他のどの変数よりも女子生徒であることが強く影響力を持っていることが本分析で改めて確認された。一方で先行研究とは異なり、友人の質ではなく中学生では友人の数が自尊感情に影響を及ぼしていることが確認された。中学生では深い関係性よりも目にみえる量的な関係性の方が明示的であり、多くの友人を持つことが自身を有用な人間として捉えることができると推測できる。自尊感情は他者との比較の中で見出される側面もある(伊藤・小玉 2005)。そのため、中学生にとってはどれほどたくさんの友人と繋がることのできるのかが重要な要素となってくる。また他者との比較という点では、学力も一つの他者との比較の中で浮かび上がってくる要素である。さらに学力についても教科によって生徒たちの自尊感情に与える影響力が異なることが確認された。本稿の質問紙調査が行われた N 中では英語と数学が教科の中で自尊感情にプラスの影響を持っている教科であり、それも生徒たちの比較の中で生まれた変数として捉えることができる。

他者との比較が自尊感情に影響を与えている一方で、保護者や教員との信頼関係という他者との比較ではない点からも生徒たちの自尊感情に影響を与えている点に着目をする必要がある。他者との比較はいわば一つの競争の中に身を置かれることであり、それは人によっては心地の良いものではない。そういった競争的な環境以外にも自尊感情を高めることは生徒たちにとっても重要な場として考えることができる。そして、そのような競争的ではない場で生徒たちにそれぞれの個性を大事にする価値観を伝えることも重要なこととなる。なぜならばそれは生徒たちを他者との比較の中での自身の価値を見つけることからの解放に結びつき、生徒たちにより安心を与えることにつながるからである。

本稿の分析は N 中学校という限られた場でのデータからの分析であり、普遍的な一般化は難しいが中学生の自尊感情研究に対して、一つの事例として学問的な貢献ができると考えることができる。本稿での知見を踏まえて、今後より質的に中学生たちの日常生活に見られる社会的な要因と自尊感情との関係を吟味していく必要が求められる。

〈注〉

- (1) 文部科学省の調査では「自尊感情」ではなく、「自己肯定感」というキーワードで調査が実施されている。しかし、国立教育政策研究所(2015)の『生徒指導リーフ』でも述べられているように、一般的に「自尊感情」は「自己肯定感」「自己存在感」「自己効力感」と同じ意味合いで用いられることが多く。本稿でも文部科学省の「自己肯定感」を「自尊感情」と同じ意味合いとして扱っている。
- (2) 「自分には、自慢できるところがあまりない」「得意なことよりも苦手なことの方が多い」の2つの質問項目に関しては結果を反転させて主成分分析を行った。
- (3) 教科別理解度は解釈が複雑になるため、本分析では教科別理解度は省き、学力の点で分析を実施した。

〈引用文献〉

- 遠藤由美, 1999, 「『自尊感情』を関係性からとらえ直す」『The Japanese Journal of Experimental Social Psychology』Vol39, pp.150-167.
- 伊藤正哉・小玉正博, 2005, 「自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討」『教育心理学研究』54, pp.74-85.
- 鹿児島県教育委員会, 2020, 『仲間づくり～自尊感情を育むために～』。
- 加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里, 2013, 「中学生の自尊心を低下させる要因についての研究：批判的思考の発達との関連から」『静岡大学教育学部研究報告人文・社会・自然科学 篇』63 巻, pp.135-143.
- 国立教育政策研究所, 2015, 『生徒指導リーフ「自尊感情」？それとも「自己有用感？」』。
- 文部科学省, 2017, 『自己肯定感を高め、自らの手で未来をひら切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上』。
- 小塩真司, 1998, 「青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連」『日本教育心理学研究』46, pp.280-290.
- 寺島拓幸, 2007, 「重回帰分析」『SPSS による多変量解析』オーム社, pp.161-185.